

■特別寄稿

全国大会の開催に当たり、佐賀ユニバーサルデザイン推進会議会長、及び同会議アドバイザーの8名の方々に身近に広がるユニバーサルデザインの紹介、考えなどについて寄稿いただきました。

◎特別寄稿－1



寄稿文：佐賀は、ユニバーサルデザイン

寄稿者：大草秀幸氏（佐賀ユニバーサルデザイン推進会議
会長、アバンセ館長）

第5回ユニバーサルデザイン全国大会を12月21、22日、湯の里・嬉野市で開く。

「ユニバーサルデザイン、UDと言っではいるが、県民のみなさんにどれくらいにご理解いただけているものか」。大会を主催する佐賀県の古川康知事は、そのことがとても気がかりだ。「大会開催で県民のみなさんに理解を広げ、情報発信によってユニバーサルデザインニッポン実現に向けてのスタート切りたい」との思いから広報にも力が入る。手元の調査データによると、ユニバーサルデザインについて、県民の約65%が「聞いたことがある」と答え、27%が「意味を理解している」という。

インターネットで世界をつなぐ高度情報社会では、外来語の洪水である。「ユニバーサルデザイン」も違和感なく口にするが、果たしてその意義と多様な内容の理解が進んでいるのか。バリアフリー環境との違いは何か。ユニバーサルは英和辞典に「全世界の、万人に通じる」「全員の、一般的な」「万能の、多方面にわたる」などとある。従ってユニバーサルなデザインは、だれもが享受できる万能で快適なモノ・設備・サービス・システムということになる。

「パーキングパーミット」は佐賀県発のユニバーサルデザイン。スーパーストアやレストラン、病院や市役所など、およそ人が集うところの駐車場には、車いすマークの指定駐車スペースが施設入口の最も近いところに確保されている。ここに駐車できる対象者は、車いすの人に限らず高齢者、妊婦、松葉づえの負傷者なども対象となる。

4年前に取り組みが始まり、県内では全市町の1,400箇所に広がり、県外にはすでに15県に波及し、増え続けている。

佐賀県は、ユニバーサルデザインで「3世代みんなが安心して暮らせるまち」を目指す。前回の第4回大会は4年前、熊本県だった。当時の潮谷知事の思いに共感し、第5回大会のバトンを自ら受けた古川知事の思いは、人に優しい社会の実現であり、これから佐賀県の歩む道、姿を指し示している。

「佐賀は、ユニバーサルデザイン」－これがキャンペーンのメインテーマである。

◎特別寄稿－2



寄稿文：ユニバーサルデザインって何？

寄稿者：古瀬敏氏（佐賀ユニバーサルデザイン推進会議アドバイザー、
静岡文化芸術大学デザイン学部空間造形学科教授）

はじめにユニバーサルデザインとは何かについて語りたい。

「すべての人にとって、できる限り利用可能であるように、製品、建物、環境をデザインすることであり、デザイン変更や特別仕様のデザインが必要なものであってはならない」そのように定義されている。簡潔に言えば、そこには「利用できない人がいないようにしたい」という強い意思があるのだ。

もともとこの考え方は、誰もが自由に入って使えるはずの建物のデザインが、身体障害者を差別していたことに対する異議申し立てから出発している。入り口の階段や段差をはじめとして、苦勞して中に入っても廊下や部屋が狭く、トイレも車いすでは使えないのが当たり前といった状況は、現在でも私たちの暮らしの中にごく普通に見られる。それを使えるようにするために直すのは、お金が余分にかかるだけでなく見栄えも悪い。

このことが認識されるようになって、「使う上での不都合が起こらないように当初からデザインしよう」というのがユニバーサルデザインである。そうすれば格別に意識せずに、だれもが一緒に使えるようになる。しかも、使いやすさが向上するのは、何も障害者に限ったことではないということが、みんなに理解されるようになった。

この考え方は、製品やさまざまなサービスにも共通しているので、そうしたものにもユニバーサルデザインが適用されてきている。ただ、みんなが同じものを使うわけではない場面では、解決は一筋縄ではいかないのが悩みだ。

例えば、各人がそれぞれ使う文房具や道具などは個人に合わせて選ぶことができるが、普通、住宅には一つしか用意されないキッチンや洗濯機の高さは、家族の中のだれに合わせるのがいいのだろうか。親か、子どもか、それとも祖父母。これは悩むところだが、原則はいちばん不便を被る人に合わせることだ。そこでどうしても折り合いがつかないときに特別な解決策が検討されるべきだ。

このようにしてユニバーサルデザインは、暮らしの中に根付いていくことになる。

◎特別寄稿－3



寄稿文：K I S S

寄稿者：細山雅一氏（佐賀ユニバーサルデザイン推進会議アドバイザー、
細山UD - U n i t 代表）

最近はパソコンを使う人が増えてきた。私も日常的にパソコンに向かっている。長い時間の作業になると、当然のどが渇き、飲み物が欲しくなる。だがいちいち席を立て飲み物を取りに行くのも面倒だ。このような日常生活の一場面を想定しながら、ユニバーサルデザインとは何かを紹介したい。



シリコンキャップ「K I S S」

普通の事務作業なら、傍らにコーヒーやお茶を置き、欲しい時に飲むのだが、パソコンに水モノは禁物。万が一、飲料がパソコンにこぼれたら瞬時に壊れてしまうからだ。そこで私が愛用しているのが「K I S S」。ペットボトルの口にかぶせるキャップだ。

シリコンでつくられたK I S Sには、細いスリットが空いていて、普段は閉じているが、軽く噛むと隙間が開き、キャップをしたまま飲めるという仕組みだ。K I S Sをしたままだとペットボトルを倒してもこぼれないのがミソ。パソコンの傍らに置いても安心というわけだ。

もともと手の不自由な人を想定して開発されたようだが、パステルカラーのシンプルで美しいスタイリングは、大人が使える道具としても気に入っている。そして「これがユニバーサルデザイン商品だ」とも思っている。さりげなく美しく、誰が使っても使い心地が良い。チョットしたアイデアであるが、日常の中に課題があり、それを解決しようとする中で、ユニバーサルデザイン商品は生まれるのだと実感する。

これまでユニバーサルデザインは、不便さの解消ばかりに目が向けられてきたが、こんなシンプルで楽しい商品がどんどん生み出されることを期待したい。

ユニバーサルデザインで、世の中どんどん楽しくなりますよ。

◎特別寄稿－4



寄稿文：空港のユニバーサルデザイン新時代

寄稿者：秋山哲男氏（佐賀ユニバーサルデザイン推進会議アドバイザー、
日本福祉のまちづくり学会副会長）

2010年10月21日に開港した羽田国際空港は、4年間をかけて積み上げたユニバーサルデザイン設計の成果によってできた空港である。中部国際空港を見習い、2006年から4年をかけて開いた10回の委員会と38回の障害当事者と専門家によるワークショップに負うところが大きい。

第一の特徴は「継続的チェック」である。つまり設計中の障害者参加による整備はもちろんのこと、開港以後も継続してユニバーサルデザインの観点から問題点を解決する方法が取られた。第二の特徴は「空港職員全員がコンシェルジェ」という新しい考え方、つまり障害をお持ちの人に対しての接遇・介助など人的対応を重視していること。第三は、今までの公共交通の整備で弱かった情報系の整備、特に聴覚障害者の対応が一步前進したことである。

今回の設計の成果は、何と言っても聴覚障害者4人と専門家によるワークショップから引き出されたさまざまな課題をT I A T（東京国際ターミナル株式会社）が丁寧に解きほぐし、対応を図ったことである。その事例を3つ紹介してみたい。

- ①空港の案内施設・磁気ループ ～ 障害をお持ちの人が迷った場合のインフォメーションセンターにいくつかの設備を設置した。その一つが、難聴の方とのコミュニケーションができる磁気ループシステムである。また簡単な会話が指差しできる絵写真と文字で構成されているコミュニケーションボードである。
- ②エレベーターの緊急対応 ～ 鉄道駅やバスターミナルなどでの緊急時のトラブル対応がなかなかできない。エレベーターの緊急時のボタンを押して待つと、係の人が駆け付け、必要な内容を例えば「あと5分で復旧します」など紙によって利用者に知らせる。
- ③緊急時のトイレのフラッシュライト ～ 聴覚障害者がトイレの個室に入っているときに火災などが発生した場合の、緊急時の黄色のフラッシュの点滅により何かが起こったことを知らせる。
こうしたことはほんの一部だが、羽田国際空港はユニバーサルデザイン新時代の到来を告げている。

◎特別寄稿－5



寄稿文：より多くの人に分かりやすく伝えるために

寄稿者：井上滋樹氏（佐賀ユニバーサルデザイン推進会議アドバイザー、
博報堂ユニバーサルデザイン所長）

「ユニバーサルデザイン」という言葉に出会い、それがライフワークになって15年が過ぎた。広告会社に入社以来、ずっとデザインに関わってきた。

ある時、自分が制作した広告を自慢げに祖母に見せた。すると祖母は「活字が小さすぎて読めない」と言った。それは、私にとってひどくショックな出来事で、今も心に焼きついている。情報の「送り手」と「受け手」の間に、大きなギャップが生まれていることを思い知った瞬間だった。

当時のわが家は、明治から平成生まれまで4世代7人家族。家の階段や家電製品はもとより、家族旅行などを通じて、家族一人ひとりに、どんな商品や建物、情報などの環境が必要なのか、ニーズを聞いた。そうしていくうちに、いつしか私はユニバーサルデザインの専門家になっていた。佐賀県のユニバーサルデザインのアドバイザーになって、「3世代が暮らしやすい佐賀」という言葉を提案したのには、そういう背景があった。

その後、世界にユニバーサルデザインを普及啓発させた米国ボストンの研究所に特別研究員として招かれ、世界中の最先端のユニバーサルデザインに触れた。海外講演でも家族のエピソードを話し、これが普遍的な考え方であることを再認識した。

ユニバーサルデザインは、難しいことではない。「みんなにとって利用しやすい街や建物、情報やサービスを、行政や企業などが、市民と一緒に作り上げていくこと」なのである。

帰国後の昨年5月、「博報堂ユニバーサルデザイン」を開設した。作り手の独りよがりではなく、より多くの人に、分かりやすく伝えるためのコミュニケーションの開発。デザインも、文字も、色も、音も、空間設計も、あらゆるものを見直して、人に優しいコミュニケーションを少しずつ進めている。

佐賀のユニバーサルデザインは、世界も注目する大きなチャレンジだ。家族を想うような温かい気持ちで取り組めば、きっと素晴らしい佐賀が出来る。

◎特別寄稿－6



寄稿文：UDものづくり

寄稿者：田村房義氏（佐賀ユニバーサルデザイン推進会議アドバイザー、
TOTO（株）UD研究所企画主幹）

ユニバーサルデザイン（UD）とは、「年齢、性別、身体的状況、国籍、言語、知識、経験などの違いに関係なく、すべての人が使いこなすことができる製品や環境などのデザインを目指す概念」と百科事典にある。

私が勤める会社では「一人でも多くの人に使いやすい」ことを目指して、水まわり商品の開発に取り組んでおり、身近なところからユニバーサルデザインを紹介したい。

日常生活の中の調理・入浴・洗面・排泄などは、誰もが毎日、当たり前に行う行為であり、水まわり商品は、「毎日必ず使うもの」「みんなが必ず使うもの」である。だから、「ユニバーサルデザイン」という言葉がクローズアップされる前から、企業の社会的責任として、多様な身体状況や年代、家族構成やライフステージの変化に対応できるよう、“生活になくってはならない”商品づくりを行ってきた。



2006年にはユニバーサルデザイン研究所（神奈川・茅ヶ崎市）を設立し、快適な商品の開発に取り組んでいる。具体的には、お客さまとの対話を重ね、使われている場面を観察し、その気付きをものづくりに反映している。その商品開発の仕組み（マーケティング～商品企画～開発～生産～発売～発売後の使用実態確認という開発プロセスのさまざまな場面で、生活者に評価いただく）を「UDサイクル」と名付け、これを継続していくことで、より良い商品づくりに取り組んでいる。

“生活者に評価いただく独自のしくみ”の代表的なものの一つに、「生活シーン検証」がある。商品開発の各ステップで行っているが、研究所内の検証スタジオに実生活空間を再現して、商品・試作品などを、お客さま（実生活者）に実際に使用していただき、一連の操作、行動を観察している。

水まわり商品は、水量・水温などの違いで使いやすさや快適感に大きな違いが出るため、極力「いつもの使い方を自然に行ってもらおう」ことが評価する上で大切である。

◎特別寄稿－7



寄稿文：共用のスロープから始まるユニバーサルデザイン

寄稿者：山崎泰広氏（佐賀ユニバーサルデザイン推進会議アドバイザー、
（株）アクセスインターナショナル代表取締役）

ユニバーサルデザインの講演でいつも話す体験談がある。それは15年前に賃貸マンションに引っ越した時の話だ。

私は車いすを必要としている。当時、バリアフリーのマンションはなく、なんとか簡易リフォームでトイレと浴室を使用可能にできるマンションはないものかと探し、見つけた。しかしマンション入り口にはバリアとなる段差が2段。そこで私は大家さんに「費用は負担するのでスロープを付けさせてほしい」と頼んだ。しかし大家さんは渋い顔。そこで「見た目も良くするので」と嘆願し、どうにか了解を得た。

私は知人に立派なスロープを作ってもらい、マンション生活がスタートした。ところが驚くべきことが起きた。入居者の多くがスロープを使用しているのだ。ベビーカー、妊婦、杖をついた人、高齢者、三輪車の子ども、疲れている人、そして台車を押した宅配業者。

私はとても嬉しくなった。車いす用に作ったスロープが喜んで使われている。バリアフリーのために作ったスロープが共用となっている。後からバリア除去のために作ったスロープなので、厳密にはユニバーサルデザインとは言えないが、みんなに喜んで使ってもらえるのならユニバーサルデザインではないか。

もし、スロープにチェーンと鍵を付けて、私専用にしていたらどうなっていたのだろう。恐らく「邪魔だから撤去せよ」という声がすぐに上がったに違いない。「専用にするなんてそんなバカなことはしない」とだれも思うだろうが、現実には、障害者専用の設備はそれと同様だ。だからユニバーサルデザインが大切なのだ。

5年後の転居時、管理会社は「原状回復、スロープ撤去」を指示したが、大家さんからは「みんな喜んで使っているから置いていてほしい」との申し入れがあった。

あれから10年、今でもそのスロープが使われているのを見ると嬉しくなる。これは15年前の話。今なら最初から段差を作らないユニバーサルデザインが可能なはず。みんなが喜ぶユニバーサルデザインの設備や建物をどんどん作ってほしい。

◎特別寄稿－8



寄稿文：日本型ユニバーサルデザインを考える

寄稿者：梶本久夫氏（佐賀ユニバーサルデザイン推進会議アドバイザー、
（株）ジー・バイ・ケイ代表取締役）

Think Globally Act Locally—「地球規模で考え、地域で行動する」というのはエコロジーのキーワードだが、ユニバーサルデザインにも当てはまる。地球上どこでも、「ユニバーサルデザインが一人ひとりの命が輝く社会をつくるための処方箋」ということでは同じだとしても、実現の方法は、地域により千差万別である。

アメリカ生まれのユニバーサルデザインの概念は、日本の風土に合わせて咀嚼し、言い換える必要がある。アメリカでは、「基本的人権」という哲学に立脚した障害者福祉に焦点が置かれているが、日本ではむしろ高齢社会が軸足にある。そして、「個人の権利」に基づくのではなく、障害のある人や高齢者に対しても「われわれは仲間なのだ」という日本独特の家族主義・仲間意識を表に出して取り組んだ方が受け入れやすいと考える。

地球全体で見ると日本国は地域、日本国を全体とすると都道府県は地域、そのそれぞれの地域では人々の顔が見えるコミュニティが地域となる。日本型ユニバーサルデザインは、地域での小さな取り組みの重なりの中から、そのカタチが見えてくるのである。

ユニバーサルデザインは、初めは製品づくり、建物づくり、まちづくりのハードウェアを中心に考えられてきた。今でも、建物・土木、インテリア環境などの施設計画では、アクセシビリティ（障害のある人の利用可能・接近可能性）と認識されることが多い。

しかし、我々は少しずつ認識を改めてきている。ハードウェアを考えるには、それを設置し、また運営するためのソフトウェア、つまり理念や制度、仕組みがしっかり整っていないということである。

また、ユニバーサルデザインを一時的な流行語のように掲げ、奇をてらう道具にしてはならない。個々人の多様性が尊重されながらも目的に見合うハイブリットな社会がユニバーサルデザイン社会である。

◎特別寄稿－9



寄稿文：市民参加型ユニバーサルデザインのまちづくり

寄稿者：関根千佳氏（佐賀ユニバーサルデザイン推進会議アドバイザー、
（株）ユーディット代表取締役社長）

いよいよ嬉野でユニバーサルデザイン全国大会が開催される。全国の自治体や企業が、佐賀県がどこまでユニバーサルデザインを理解して進めて来たかを、確認するときが来たのだ。ベビーカーですれ違えるまち、プラチナ世代を満足させる高品質で使いやすい商品、海外からのお客さまをリピートさせるサービスなど、多様な年代やニーズを持つ人々に、佐賀がどれだけ真剣に向きあってきたかが問われている。

全国で初めての「温泉地」での開催。かつて長崎街道の宿場町として人々を癒してきた嬉野が、今は日本で最も優しいおもてなしをする温泉街として訪れる人を癒すのだ。

佐賀は少し地味な印象がある。長崎生まれ、博多育ちの私には、佐賀の親戚や友人はたくさんいるが、みな質実剛健だ。でもだからこそ、信頼できるのだ。

嬉野のお湯は素晴らしい。お豆腐はイソフラボンが豊富だ。お茶も美容にいい。女性に嬉しい要素がたくさん詰まっている嬉野なのだから、もっと歩いて楽しく、滞在して嬉しい街になってほしい。良いものはたくさんあるのに、まだ磨かれていないし、国内外の潜在顧客にきちんと情報発信されてもいない。住んでいる市民や訪れた顧客の言葉で、もっと情報が発信されたら、まちの財産になるのだが。

総務省のICT人材育成プログラムも、市民参加型ユニバーサルデザインのまちづくりを支援するために付いた助成金である。市民や観光客や、たくさんの人々が、その街を愛し、その街をもっと良くしたいと思って、課題を伝え、いい点を褒める。それがあすの嬉野、佐賀県、九州全体の観光を、行政を改善していくのである。

この大会が、10年後、30年後の佐賀を変えるだろう。世界最高齢国家となった日本の経験が、今後高齢化するアジア各国のお手本となって世界を救うように、嬉野の市民たちの声の集積が、いつか日本の街や観光の在り方を変革し、そして救うかもしれない。大会の成功を望んでやまない。